The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Jacques Derrida, ”Adieu-à Emmanuel Lévinas”, Galilée(1997)
Author(s)	小森, 優作
Citation	年報人間科学. 2003, 24-1, p. 107-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Jacques Derrida

Adieu — à Emmanuel Lévinas —

Galilée（1997）

小森優作

エマニュエル・レヴィナスの名がしきりに口にされるようになって久しい。フッサールの現象学とハイデッガーの存在論とを早くからフランスに導入し、以後その乗り越えを模索した人物である。レヴィナスの名が広く注目を集めるようになったのは、フランスでも1970年代後半のことである。少なくとも64年より前にまで遡ることはない。周知のとおり、レヴィナスの思想の世界的な撒種は、デリダの功績に大きく依っている。「暴力と形而上学」（1964）は、レヴィナスの思想を最も早くに論じ、多岐にわたる批判を展開する稀有な論文であった。以後、レヴィナスの思想的変遷はデリダの存在を抜きにしては語れない。他方でデリダも、レヴィナスとの対話のなかから多くの資源を汲んできている。両者はいわば相応答する形で、それぞれの思想を先鋭化してきたのである。その思想的切り結びを、まずは簡単に確認することから始めたい。

レヴィナスによれば、西洋哲学の歴史は「他者」へのアレルギーに侵されており、他者を同者へ解消することを目指すものであった。『全体性と無限』（1961）の試みは、こうしたギリシア的ロゴスの内部に回収し得ないまったき他者の経験を示すことにある。ところがデリダによれば、レヴィナスの試みはそもそもロゴスの暴力を前提にしなければ不可能である。他者が同の論理やあらゆる一般化を拒むならば、それを言葉（ロゴス）によって語ること自体が端的に矛盾をはらんでしまうのではないか。デリダからの問いかけに対し、レヴィナスは『存在の彼方へ』（1974）で可能な限りの応答を試みる。そこでは「語ること」と「語られたこと」、「前言撤回」

といった種々の方法を駆使して、他者の「存在するとは別様に」を散発的に素描する試みがなされる。特に重要であるのは、「身代わり」と題された章である。レヴィナスはそこで、主体とは他者の「身代わり＝人質」であると説いている。この発想は恐らく、デリダにおける記号の概念から得られたものである。『存在の彼方へ』の一年前に発表された論文のなかで、レヴィナスは次のように語る。「記号とは、あるものが他のもののために身代わりになることである。……置換、身代わり、代補、それは他者への私の責任としての他のためにである」（『固有名』）。レヴィナスからのこの応答は、デリダにとって大きな意味をもったはずである。「記号」という問題が、いわば他者や倫理といった問題に積極的に開かれていることが示唆されるのである。フッサールやソシュールにおける記号の問題から出発したデリダが、他者や倫理、正義、責任といった一連の問題系へ移っていく経緯には、まずレヴィナスの影響が色濃い。

デリダとレヴィナスとは、互いに応答し合うことによってそれぞれの思想を育んできた。その意味でも1995年12月25日のレヴィナスの死は、デリダにとって大きな痛手であっただろう。「長きにわたって、実に長きにわたって、私はエマニュエル・レヴィナスにアデューを言わなければならないことを恐れていた」（Adieu）。デリダからの呼びかけに対し、レヴィナスが応えることはもはやない。レヴィナスの死を通じて、デリダはあらためて他者への「応答可能性／責任（responsabilité）」という問題に直面したのである。死者への、そして、もはや／いつもすでに現象しないものとしての他者への責任とは何か。本書においてデリダは、レヴィナスの哲学を「歓待（hospitalité）」の思想として読み解いていくことで、この問いに可能な限り応えていこうとする。

本書は二つの講演からなっている。一つは1995年12月、パリのパンタン墓地で読まれたレヴィナスへの弔辞「アデュー」。もう一つは翌年の同じく12月に、レヴィナスを記念するコロキアム（「顔とシナイ」）で読まれた「迎え入れの言葉」である。本書とほぼ同時期に刊行された二つの書（『歓待について』（1996）『万国の世界市民たち、もう一努力だ！』（1997））が、クロソウスキーやカントにおける「歓待」の問題を扱うものであったことを考えれば、この問題が当時のデリダにとってとりわけ強い関心を引くものであったことは確かである。本書においてデリダは、レヴィナスの著作をやはり「歓待の大著」として読み解いていく。

他者を迎え入れることはいかにして可能であるか。まず始めに、このように問うことはレヴィナスの倫理学において意味をなさない。レヴィナスによれば、他者とは自己に先立っていつもすでに到来しているものだからである。私は他者を迎え入れるよりも前に、他者へと暴露されている。他者はいわば「強迫／取り憑き（obsession）」として、私のイニシアティブを無限に奪い取っていく。それゆえレヴィナスの倫理学にあっては、歓待という言葉の意味はまったく別なものへと書き換えられることになる。歓待とは単に、家と土地を所有する主人が、訪問してきた客を迎え入れることではない。それ

はむしろ、迎え入れる者が、迎え入れられる者によって、まず迎え入れられているという困難な事態を含意しているのである。この事態を説明するために、デリダはフランス語の「hôte」という語の両義性に注目する。hôteは主人（host）を意味すると同時に、客（guest）を意味する。主人と客との位置はつねに入れ換えが可能であり、両者の境界を確定することは難しい。「主人／客は、客／主人である（L'hote est l'hôte）」。主人は自らの所有権／固有性（propriété）、そのもの性（ipséité）を奪われ、その地位を宙吊りにされる。デリダはこのように、主人／客という二項の曖昧さを示していくことで、まずは歓待という倫理的事象の意味を根底から覆していく。

私の迎え入れの運動に先立って、他者がいつもすでに到来しているということ。デリダはそのことを指して、私と他者との間には根源的な「oui（諾）」があると言う。このouiは、単にnon（否）に対立するそれではない。それは主体の発するあらゆる運動に先立って、他者との関係をあらかじめ開いているような根源的な肯定である。私はもちろん、他者に対してnonを言うことができる。つまり他者の到来に対して、それを拒絶することも無視することもできる。しかし他者との関係、他者との接触は、私の意識的な能動性を超えていつもすでに生じているのであるから、その否定は本質的に二次的である他ない。私は自らのイニシアティブを欠いたところで、他者の到来にouiを言っているのであり、他者のouiによって無条件的に迎え入れられているのである。

歓待の倫理とは、いわば私と他者との最初の関係を素描する試みである。それは確かに倫理の名において考えられるものであるが、主体の為すべき何らかの実践に関わるような問題ではない。レヴィナスに即してここでまず指示されていることは、内在に内在する超越（transcendance dans l'immanence）、超過の内包(inclusion de l'excès)といった原事実であり、他者による最初の「幸福なトラウマ」が私の意識の内に／を超えて書き込まれているということである。それは他者との最初の関係を問うている限りで倫理学であり、かつてレヴィナス自身が述べたように哲学に先立つ倫理学である。

ところでこれまでの議論では、あくまでも「単一」な他者と「単一」な私との関係が問題になっていた。レヴィナスに戻って確認すれば、他者とは無限であると同時に単一であり、有限でやはり単一な私に向かって「顔」として呼びかけてくる。この呼びかけは「選び」とよばれ、それによって私と他者との間に特異な関係が築かれる。この関係は絶対的に「非対称的」であり、私は他者に対して果たすことの困難な責任を負う。ユダヤ教による影響の明らかに色濃いこうした議論を、レヴィナスは主として『全体性と無限』のなかで展開している。ところが『存在の彼方へ』の第五章になると、レヴィナスはこれまでの議論とはほとんど矛盾するとさえ言い得るような転回を行なう。第三者（tiers）、ないし他者の複数性（pluriel）への言及である。私は現実において、ただ一人の他者のみでなく、複数の他者、第三者に出会っている。この第三者ないし複数の他者が現実のなかにいつもすでに介在している限り、自ずから次のよう

な問いを問わないわけにはいかなくなる。私は他者たちのうち、誰に対して最大限の責任を負うべきであるか。単一な他者と接するとき、つまり他者との対面（face à face）の関係にあるとき、私の為すべきことは明らかであった。私は目前の他者に対して、無限の責任を負う。ところが第三者は、この対面の関係、私と他者との二元論に問いを課す。第三者と隣人と、複数の顔の呼びかけに応えるために、私は比較考量をしなければならない。いわば責任の分配、経済である。ここにきて私と他者との絶対的非対称的な関係は、私をも含めた複数の他者間の対称的な関係に取って代えられる。「正義（justice）」と呼ばれるものが問われることになる。

歓待の問題に引き戻して考えよう。歓待の倫理的状況において、私は他者のouiによって無条件的に迎え入れられており、他者は私の迎え入れに先立っていつもすでに到来している。ところが、私の現実には当然のこととして常に第三者が介在している。この現実にあって、私は比較し、客観化し、平均化し、概念を形成することを求められる。いわばその時々に応じて、複数の他者たちのうち、誰かを迎え入れることにnonを言わねばならず、誰かからの迎え入れにnonを言わねばならなくなるのである。平和的で留保なしの歓待の倫理に対し、デリダはこの現実的な状況を歓待の政治と呼ぶ。前者が最善を求めるのに対し、後者はより多くの善ないしより少ない悪を追求する。レヴィナスを手がかりにして歓待という倫理的概念を分析してきた本書の議論は、ここにきて現実的、政治的な問題に直面する。両者の関係、つまり倫理的なものと政治的なものとの位階が問われなければならない。

単一な他者との非対称的な関係（無限の責任／倫理）と、裁きを可能とする等しいものの論理（正義／政治）。これら相容れない二つの要請が、レヴィナスの思想のうちに見られるのである。デリダはこの両極端を揺れながら、ひとまず1979年に執筆されたレヴィナスの政治論の名をそのままに強調する。「politique après !（政治は後に）」。レヴィナスの倫理学にあっては他者の単独性（singularité）は最優先に尊重されるべきであり、いかなる平等の理念といえどもこれを排除することはできない。とはいえ、単一な他者に対する無限な奉仕は、他の他者の単独性を損なうものでもある。「選び」は本質的に排他的であらざるを得ない。その意味では政治的なもの、つまり正義＝平等の要請は不可避である。しかしこの正義＝平等はなお、いかなる単独性をも無視してはならないのだ。ここに二重の拘束、両立不可能な二つの要請が生じる。デリダはこの相容れない二つのものを受けて、そのどちらか一方を他方に従属させなければならないとは考えない。むしろ両立不可能なものを、両立不可能なまま同時に要請するよう説くのである。政治的な現実における「中立（indifférence）」と、あらゆる規定を逃れ去っていくところの単独性の「無関心（indifférence）」とを[1]。「歓待」という概念をめぐって展開された本書の議論は、最終的に、レヴィナスの思想に民主主義の不可能な問いを見出していくことに収束する。

さて本書の議論をひとまず通読したうえで、責任／義務の問題に

ついて、またそのことをめぐるデリダとレヴィナスとの差異についてあらためて論じておきたい。すでに何度も繰り返したように、レヴィナスは西洋哲学の内部に解消しきれないまったき他者を問題にし、それへの責任を喚起する。本書の表題にもなっているadieuは、この他者への法外な責任の意が込められたものである。adieuをあえてà-dieuと読みかえることで、無限な他者への一方的な、一方向の線（trait d'union）としての義務が言い表されるのである。ところでレヴィナスの語る他者には、常に二重の含みがある。一方で他人としての他者であり、他方で非ヨーロッパとしての他者である。そしてここにいうヨーロッパとは、はっきりとギリシアの系譜である。ギリシア的なるもの、恐らくこう言ってよいと思うが、「知」に対置して、レヴィナスはユダヤ的なるもの（義務／責任）を持ち出すのである。ヨーロッパの知は、その他者に対して応答をしなければならない（＝責任をとらなければならない）。率直に、レヴィナスはそう主張する。知が義務に従属することになるのだろうか。レヴィナスに即する限り、そうだといえる。歴史的な事実をここで喚起してほしくはないのだが、ヨーロッパと非ヨーロッパとの何らかの従属的地位を、レヴィナスが転倒しようとしたことはひとまず確かである。何にもましてレヴィナスは、ギリシア由来の哲学の、「可能性の条件」としての倫理学を確立しようとしたのだから。

デリダについて同じことがいえるだろうか。デリダはヨーロッパの自己同一性のなかに、他者への開けが含まれることを一種の原事実として認める。その上でやはり、この他者への応答／責任を要求する。いわば「混血ヨーロッパ人」を自認する、自らの出自そのままに。とはいえデリダは、応答の可能性が常に応答しない可能性を含んでいることを、そして必ずしも無条件的に応答すべきであるとは限らないことを、強調してもいる[2]。そうであれば、知の義務に対する関係は、単刀直入に従属的であるということはできない。誤解を招く言い方かもしれないが、デリダはレヴィナスほどには「誠実」ではないのである。知と義務との間には、つまりギリシア的なものとユダヤ的なものとの間には、取り込みきれない差異がある。この両者の和解を、何らかの従属的布置とは異なる仕方で思惟すること。レヴィナスとの接触以来、デリダの最大のモチーフはここにあると言うことさえできる。とはいえデリダのある種の読まれ方が、この二つの差異の間で極端に揺れていることは確かである。つまり一方で、メシア性や他者性を前面に押し出し、倫理的な部分を率直に語る過剰な誠実さ。他方で、旧来の形而上学テクストの内部に定位しつつ、その諸前提をことごとく転倒していく知の戯れ。この二つの両極端の間で、脱構築をめぐる態度決定が現に問われているように思われる。だが本当にそうだろうか。「暴力と形而上学」の、最後の問いは一体何であったのだろうか。「われわれは〈まず〉ギリシア人であるのか？それとも〈まず〉ユダヤ人であるのか？」われわれは「まず」どちらかを選択して読まねばならないのだろうか。

注

（1）この点に関してはアレクサンダー・ガルシア・デュットマン『友

愛と敵対』(2002 月曜社) が詳しい。また本書の議論の問題も含めて、後期デリダとレヴィナスの思想を引き受けつつ、批判的に議論を展開している者にSimon Critchleyを挙げておく。*Ethics / Politics / Subjectivity* 1999

(2) 例えば『パッション』(2001 未来社)